国立国語研究所学術情報リポジトリ

高知県幡多郡大方町方言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003028

方言録音資料シリーズ ―8

高知県幡多郡大方町方言

土　居　重　俊　編

1 9 6 8

このテキストは，総合研究「地方における話しことば教育法改善のための基礎的研究」（代表者大石初太郎）の一部として，研究用の資料として作られたものである。

方言の録音方法，方言の表記の方法などのあらましについては，別に作った「方言の録音とテキストの作成について」（国立国語研究所　話しことば研究室編）を参照されたい。

ここに収めた方言の録音とテキストの作成とは，高知大学教授 土居重俊 が担当した。

もくじ

収録地点とその方言について …… 2

表記について …… 3

本　文

1. 木挽閑談 …… 5

2. 漁師の思い出話 …… 16

注 …… 34

収録地点とその方言について

1. 収録地点名：高知県幡多郡大方町

2. 収録地点の概観

中村市の東方に位置する農村兼漁村。広い海岸線と松林に囲まれた町。藩政時代は幡多郡入野郷と呼ばれた。昭和１８年３村が合併して大方町となり，昭和３１年に４村合併。米原に尊良親王行在所跡がある。産物として米・麦のほかナロール（芳樟）・葉たばこの生産が盛んである。国道５６号線が町を東西に貫通して，近く国鉄中村線が開通する。

3. 収録した方言の特色

四つがなを区別する。連母音が長音化されない（特殊の語い的現象は別）。ガ行ダ行の前の母音が鼻音化する。ソーニカーラン（そうらしい），ノーガワリー（具合が悪い）などの用法があり，土佐方言的特色をよく備えている。ただしアクセントは乙種である。

4. 地点選定の理由

幡多方言の代表的地点と思われる。

表記について

〔指定の字母以外に使用した字母，および使用した補助記号〕

特になし

1. nasalizationが強く出る場合（たとえば〔$ni^{n}\tilde{g}at^{s}u$〕）も，弱く出る場合も，一様に □$\tilde{d}$；□$\tilde{g}$ のように表記してみた。

1. 木挽閑談

録音日時　1967年9月3日
録音場所　林家（大方町湊川）

話し手

（略号）	（氏　名）	（性別）	（生　年）	（職　業）	（居　住　歴）
H	林八十次	男	明治15年生	木挽→農業	高知県幡多郡大方町湊川に永住

解説：老木挽が木を切る体験談を相当具体的に話している。

H kobikisuru hitowa naine: ima dabano: gaqko:—
木挽をする　人は　いないね　今　駄場の（地名）　学校

no sorano tju:kitijo ima takakikujone:(1) tju:wa
の　上の　忠吉よ　今　高木の家よね　忠は

naikeNdo ano ieo tateru tokiranine: kubokaー
いないけれど　あの　家を　たてる　ときなどにね　窪川

watjo:no matubaka: ju: tokorono okuni oreai
町の　松葉川と　いう　ところの　奥に　オレアイ（地名）

ju: kaNko:(2) g̃a ar'ũg̃a uNto hutoi jamarasi:g̃a
という　官公が　あるが　うんと　大きい　山らしいが

ano ieno ano ieno hoNbasirawa tõg̃a:no tõg̃a:—
あの　家の　あの　家の　本柱は　栂の　栂

no sorja riqpana kio saNzjakukakuba:no monoo
の　それは　りっぱな　木を　三尺角ぐらいの　ものを

kasjãd̃e: ako ite kio ko:tjoite kasjãd̃e zu:—
荷車で　あそこへ　行って　木を　買っておいて　荷車で　ずー

qto torimahite gaqko:no simono mitino hata—(3)
っと　取りよせて　学校の　下の　道の　はた

ni: hatakẽg̃a aqtaN arei korobasitjoitene:
に　はたけが　あったが　あれに　ころばしておいてね

(4)
aremãdja: dojara kojara toqtikitjoru hikitẽga
あそこまでは どうやら こうやら 取って来ているが 引く人が

nakaqtãgajo soituo saNzjakũgutiba:no moNdja-
無かったのよ そいつを 三尺四方ぐらいの ものだ

keN saNzjakuno kakuba:no monoone: kakuni
から 三尺の 角ぐらいの ものをね 四角に

za:qto hatao kẽduqte saNzjakukakuno monoo
ざっと 側面を けずって 三尺角の ものを

soreo toqti kite hikitẽga(5) nakaqtãgajo dareq-
それを 取って 来て 引き手が なかったのよ 誰

tja: hikitẽga soreo hikunja: are õgajo(6) are
も 引き手が それを ひくには ほら オガよ ほら

õgao arẽdake emãde sasikoNdati deNro õgano
オガを あれだけ 柄まで さしこんでも 出ないだろう。 オガの

taketumona: nisjakurokusuNba:sika naikeN soNde
長さというものは 二尺六寸ぐらいしか ないから それで

rjohirakara(7) soituo zu:qto hikanja ikaNgajo
両方から そいつを ずーっと ひかなきゃ いけないのよ

rjohirakara sono: koqtjai(8) ma:ri aqtjai ma:ri
両方から その こっちに まわり あっちに まわり

koqtjai ma:ri zu:qto hi:te ma: hutatuni
こっちに まわり ずーっと ひいて まあ 二つに

sitara sorja sijoiwa hutatuni sitara koNdo
したら それは 容易だ 二つに したら 今度

hiqkurikaesitara mo: sjakũgosuNdjakeNne: sorẽ-
ひっくりかえしたら もう 一尺五寸だからね それ

djaqtara darẽdemo hikeru moNjo sorja hazime-
だったら 誰でも ひける ものよ それは はじめ

no: saNzjakuno kakuno monoo huta·tuni suru
の 三尺の 角の ものを 二つに する

monõga nakaqtane:
ものが 無かったね。

taite kono: o:sakakara sãgamãdeno aĩdano
ほんとに この、 大阪から 佐賀までの 間の
(地名) (地名)

ũdeno tatu kobikio tju:kitĩga ieo hazimenja
腕の たつ 木挽を 忠吉が 家を (つくり)始めねば

ikaNmoNno hasirawa dekiNtumono taite saoĩde[9]
いけないものの 柱は できないというので, 随分 さわいで
(のに)

taNmetima:[10]…… dareqtja· hi:tekuretẽga naike
さがしたが…… 誰一人 引いてくれる人が 無いので,

oraNnimo saNbeN kitane saNkai kite hĩdowa
おれにも 三べん 来たね 三回 来て 二度は

kotowaqte nĩdowa jarunimo jareN kotomo na—
ことわって 二度は やれば やれん ことも な

karo:keNdo ija ija soNna riqpana sinasio[11]
かろうけれど いや いや そんな 立派な 製品を

ukeo:te jarisokono:tara ikaNkeN omo:te sumi
うけあって やりそんじたら いけないからと 思って 墨
(言いさし)

sumĩdake[12] kuruwasitara ikaNkeNne: soNna mono—
墨だけ はずしたら いけないからね そんな もの

wa ukeawazaqta tumari saNbeNburini mo: ḍaremo
は うけあわなかった 結局 三回目に もう 誰も

taite taNmeti do:sitati hi:tikurete naĩga
随分 さがしたが どうしても ひいてくれる人が いないが

tasukeru omo:te jaqti kuri ju:te saNbeNburi—
助けると 思って やって くれと 言って 三回目

ni kite sorja sorehõḍo hikiteN nai monowa
に 来て, それは それほど ひきてが ない ものは

akõḍe kusarasu wakenimo ikumaikeni hiku
あそこで 腐らす わけにも いくまいから ひく

kotowa hikanja· ikumai ma: jakutataNjo:ni
ことは ひかなきゃ いくまい まあ 役に立たぬように

surukeNjara siraNkeNdo jaqtjaokane· ju:te
するかも 知らないけれど, やってやろうかね と言って,
(しれない)

se:kara ora: ma: hi:toi õgao kozjaNto nao-
それから おれは まあ 一日 オガを 十分 手入

hitjoite se·kara akoe ite hikijoru tjaNto
れしておいて それから あそこへ 行って, ひいていると, ちょうど

do:rono mitĩdjakeNne: ano butikara kono
道路の 道だからね あの 鞭から この
(地名)

kami simosuru hitorãga kikakaqtara naNzo
上へ行き下へくだる 人などが 来かかったら 何かを

mirujo:ni tjaNto kuroiba: hitoN[13] takaruba:
見るように ちゃんと 黒いぐらい 人が たかるぐらい

oraN sĩgotoo sijoru tokorõde ora sotõga
おれの 仕事を している ところで おれは 外が

ijãdjakeN ukeawazaqtakeNdo ma: aNmari tjũ:ga
いやだから うけあわなかったけれど まあ あまり 忠が

naiti ma:rukeN itjo·kane: ju:te sekara hazi-
泣きついて くるから 行ってみようかね と言って それから 始

mete hoNdemo: hitotumo heti jaraNdukuni
めて, それでも すこしも わきへ そらさずに

naNdjaqta kozjaNto hiki hi:tene: arewa bu-
あれだって 思う存分 ひき, ひいてね あれは 鞭
(言いさし)

tino tarõ:ga tateta hi:simo:ta toki tarõ·ga
の 太郎が 建てた ひいてしまった とき 太郎が

daikũdjakeN daikuwa taro:N jaqta nakanaka
大工だから 大工は 太郎が やった なかなか

korja riqpani ̃dekitano: ju:ba:ni hitotumo
これは 立派に できたね というぐらいに すこしも

hetimojaraNdukunine: kozjaNto hi:simo:ta
ひきそんじないでね 思う存分 ひいてしまった

koqtjaqtani ma: sono zibuNnja:ne: kobikimo
ことだった まあ その 時分にはね 木挽も

taitja hutoikoto aqtakeNdo sore hiku mono
随分 たくさん あったけれど それを ひく ものは

nakaqtakeNne: naNdjatĩdja kobikisitati
なかったからね　なんでもだ　木挽しても

daikusitati naNdjati soreba:na ũdeni narumã-
大工をやっても　なんでも　それくらいの　腕に　なるま

dja: eqkoro urusai kotowa urusai soreba:none:
では　かなり　苦しい　ことは　苦しい　それくらいのね

ũdeni narumãdewane: hoNmani: kobikĩdjakeNdo·
腕に　なるまではね　ほんとに　木挽だけれど

nakuba:na meni saNbeNba: awanja: soNgjanja
泣くくらいの　目に　三べんぐらい　あわなきゃ　そんなには

nareN sono zibuNnja: sasimoNno[14] koNna o:zasi-
なれない。　その　時分には　指物の　こんな　大指

moNno hitotamãde ziqtjo:dja zju:nitjo:dja
物の　一玉で　十町だ　十二町だと

ju· waku* saNzjakũgutiba:no monowa soNna
いう　わく　三尺直径くらいの　ものは　そんな
(このあたりはっきりしない)

riqpana monoo hiki hikitewa aqtati ukeawaza-
立派な　ものを　ひき　ひき手は　あっても　うけあわな
(言いさし)

qtaneja soNna monowa urusai soNna sĩgotowa
かったね　そんな　ものは　うるさい　そんな　仕事は

matuno matuno koNna sasimoNno hutoi moNrawa
松の　松の　こんな　指物の　大きい　ものなどは

sorja sjo:sjo heti itati do:sitati maqto
それは　少々　わきへ　それても　どうしたって　もっと

sijoikeNdo a:ju: monowa hoNmani sumio hãdu-
容易だけれども　ああいう　ものは　ほんとに　墨(鋸)を　はず

hitara uqta sumio hãduhitara ikaNto sitaba:-
したら　うった　墨を　はずしたら　使いものにならぬと　したほどの

namoNdjane: hoNdemone: arja hikijokaqtaka
ものだね　それでもね　あれは　ひきよかったのか

kire:ni kozjaNto hi:simo:ta tarõ:ga aNgja
きれいに　思う存分　ひいてしまった　太郎が　あのように

ju:takeN no: korja nakanaka kozjaNto deki-
言ったら なあ これは なかなか たいそう(立派に) でき

tano: ju:te ju:ba:nja oraN hi:tane: soreba:-
たなあと 言って 言うくらいには おれが ひいたね それくら

ni naro̜:d̜itja kobiki ju:keNdo kobikimo
いに なろうと思えば 木挽と いうけれど 木挽も

sijoi kota koNmai moNdjaqtara kozetuketed̜emo
やりやすい ことは 小さい ものだったら どうでもこうでも

hikukeNdo nakanaka kokona atarini oraN sita-
ひくけれど なかなか ここの あたりに おれの 下

wa dakemaqko̜:d̜jag̜a[15] ju: kiwa mo: ikinasini
は 断崖だが (そう)いう 木は もう いきなり

kiqte tukokasujori[16] hokani sijo: naikeNdo
切って つき落とすより ほかに しようが ないけれど

soNna tokowa ma:: meqtani nai moNdjakeN me-
そんな ところは まあ めったに ない ものだから めっ

qtani nai moNdjag̜a ko:ju: kig̜a taqtjoru
たに ない ものだが こういう 木が 立っている

dono kid̜emod̜jane: ko:ju: kig̜a taqtjoru to-
どの 木でもだね こういう 木が 立っている と

koo ko: jokosini kajahite sorekara riN[17] kake-
ころを こう 横に 倒して それから 台を つくっ

te ked̜uranja ikaNro so:ju: kio kirunja:ne:
て 削らねば いけないだろう そういう 木を 切るにはね

kono: taqtjoru kino: taqtjoru kino jamano
この 立っている 木の 立っている 木の 山の

hiraniwa kanarazu kono neg̜a haqtjoruro
側には かならず この 根が 張っているだろう

motoni neg̜a ko: zu:qto kubaqtjoruro sono
元に 根が こう ずーっと 分岐しているだろう その

neno kubarijo:ni joqted̜jane ano kio akoni
根を 分岐のしかたに よってだね あの 木を あそこに

kajaso: omo:tara jamae zuqto ho:tjoru neno
倒そうと　思ったら　山へ　ずーっと　這っている　根の

kokoni zu:qto nẽ̃ga to:qtjorukeN kono kono
ここに　ずーっと　根が　通っているから　この　この

neno kono turui[18] korja totemo tĩ̃gireru moN—
根の　この　根(?)に　これは　とても　ちぎれる　もの

dja naikeN koitui ukekutio kiq**te koitono
では　ないから　こいつに　受口を　切って　こいつの

sitamãd̃e kiqtjoite koNdo õ̃gao ko: sasikoNde
下まで　切っておいて　こんど　オガを　こう　さしこんで

jokobikio[19] kono koreo kiqtara ikaNgajo do·si—
ヨコビキを　この　これを　切ったら　いけないのよ　どうし

tati sono turuni hikahitjoite koqtjakara
ても　その　根(?)に　ひかせておいて　こちらから

jao[20] uqtara kono ukekutino kirijo:ni joqte
矢を　打ったら　この　受口の　切りように　よって

hitai jaro:to omoja ukekutio koqtjai ma:hi—
下に　やろうと　思えば　受口を　こっちに　まわし

tjoku uei jaro:to omoja ukekutio koqtjai
ておく　上に　やろうと　思えば　受口を　こっちに

ma:hitjoite sorekara jao uqte jokobikĩ̃ga
まわしておいて　それから　矢を　打って　ヨコビキが

zu:qto kakureruba:naqtara jao simetja· iki
ずーっと　隠れるぐらいになったら　矢を　締めては　いき

mata hikijoqtja· jao simetja· iki site kono
また　ひいていては　矢を　締めては　いき　して　この

turũ̃ga mo: josito omou tokini jawa uNto ki:—
根(?)が　もう　よしと　思う　ときに　矢は　うんと　利い

te ikijoqte kiwa ziri ziri ziri: kajaqti
て　いっていて　木は　じり　じり　じりー　倒れて

ikijorukeN sorẽ̃de kono turũ̃de hikahitara
いってるから　それで　この　根(?)で　ひかしたら

mo: omou tokoe ika: omou tokoe boqtiri
もう 思う ところへ 行くさ 思う ところへ ちょうど

sorẽ̃ga ma: zitũ̃djane: ki: kirunja: horekara
それが まあ 術だね 木を 切るには それから

sono: ko: naqtjoru tokorõ̃de uNto nãga nãga-
その こう なっている ところで うんと なが 流
(言いさし)

hite[21] kajahite kamawaNto ju: jokosini seNti
して 倒して かまわないと いう 横に しなくても

nãgarete kajaqte kamaNto ju: kiwa kono tu-
流れて 倒れて かまわぬと いう 木は この 根

rui hikahitjoitara murin ikaNdukuni ziqto
に ひかしておいたら 無理が いかずに じっと

kajarijoikeNdone: do:sitemo kono kiwa joko-
倒れよいけれどね どうしても この 木は 横

sini senja ikaNto omo:tara kono nakano tu-
に しなければ いけないと 思ったら この 中の 根

rũ̃de hikahite jaruto ju: ma: sorẽ̃ga ma: ki:
で ひかして やると いう まあ それが まあ 木を

kiru zituwa sokõ̃djane: sorẽ̃djaqtarane· kono
切る 術は そこだね それだったらね この

turuno hikijo:ni joqte djo:buna turũ̃djaqtara
根の ひきように よって 丈夫な 根だったら

sorja omou tokoi kajaru mo: giqtiri
それは 思う ところに 倒れる もう ぴったり

so:site sono kinone· kĩ̃ga kajaqte jokosini
そうして その 木のね 木が 倒れて 横に

kĩ̃ga kajaqte kokoni kono asãgĩ̃ga taqtjorũ̃gã-
木が 倒れて ここに この 雑木が 立っているの

djane: asãgĩ̃ga taqtjoru soituno utihirai[22]
だね 雑木が 立っている そいつの 内側に

kajaqtato sotohirai[23] kajaqtato sorja hutoi
倒れたのと 外側に 倒れたのと それは 大きい

niniNjakumo tĩ̃gauba: sono riN kakeruni ja-
二人役も 違うぐらい その 台を つくるのに 手

kũ̃ga kakara· sono ki: sono kio aiteni hite
間が かかるさ その 木 その 木を 相手に して

sono taqtjoru kio aiteni site riNo sasite
その 立っている 木を 相手に して 台を つくって

mata tuitara dikini d̃ekiru monõ̃ga kono*** ta-
また 枝を落としたら すぐに できる ものが この 立

qtjoru kijorika sotohirai kajaqtara naqtja:
っている 木より 外側に 倒れたら 何も

nai tokorõ̃djaqtara riNo kuNde tja:Nto jaq-
無い ところだったら 台を 組んで きちんと やっ

tjokana ikaNro sono omowakumo uNto aru moN-
ておかなければ いけないだろう その 思案も うんと 有る もん

jo sorja kino kajari jo:wa hutoi kĩ̃djaqtara
よ それは 木の 倒れようは 大きい 木だったら

kino kajarijo:ni joqtja mo: niniNjakumo
木の 倒れ工合に よっては もう 二人役も

tĩ̃gauba: sono jakũ̃ga kakarukeNne: mo: ki:
ちがうくらい その 手間が かかるからね もう 木を

kiruwa sorẽ̃ga zitujo
切るは それが 術よ。

orara:Nne taisjo:soNni oqte taisjo:soNno
わしらがね 大正村に 居て 大正村の
（地名）

tanonõ̃ga tju:siNde tanonono tamura ju· tokõ-
田野々が 中心で 田野々の 田村と いう とこ
（地名）

g̃a jãd̃õd̃jaqta sokokara zu:qto kajo:te tuno-
ろが 宿だった そこから ずーっと 通って 津野
（地名）

jamae iku tunojamae ikunja: tanonokara kami:
山へ 行く 津野山へ 行くには 田野々から 上へ

ite o:naro ju: toqkara zu:qto sakao ãgariha-
行って 大奈路と いう ところから ずーっと 坂を あがりは
（地名）

zimete sorekara to:mãde ãgaqtara matubara
じめて　それから　峠まで　あがったら　松原
（地名）

tunojamano matubara ju: tokoi no zaisjoi
津野山の　松原と　いう　ところに，の　在所に
（言いまちがい）

oriru jatate ju: naNdjane arja jatatesaNrino
おりる　矢立と　いう　なんだね　あれは　矢立三里の

sakãdja saNrino sakao niriba:no aĩdawa da-
坂だ　三里の　坂を　二里くらいの　間は　だ

rari darari darari darari sorekara to:mãde
らり　だらり　だらり　だらり　それから　峠まで

ãgaqtara gaqkuri orira: waera: mukasino
あがったら　がっくり　おりるさ。　お前たちは　昔の

jatate jatatetu: monoo sirumai jatatetumono-
矢立　矢立という　ものを　知るまい　矢立というもの

wane· koNmai kono kono koNmai kohũde ireru-
はね　小さい　この　この　小さい　小筆を　入れる

ba:no taqpõdjane:
くらいの　筒だね。

kaneno sorekara soitoi: hũdeo sasikoNde
金の　それから　そいつへ　筆を　さしこんで

sorekara sokoni tuboN arũgãdja sono jata
それから　そこに　壺が　あるのだ　その　やた
（矢立と言うつ

sono koitono sakini kono ma:riba:no sumio
その　こいつの　先に　この　まわりくらいの　墨を
もりであろう）

iqta tubõga aru soitoi huta soitoi hutao
入れた　壺が　ある　そいつに　蓋　そいつに　蓋を
（このあたり話に乱れがある）

tjoito hutao aketara hutao tjoito site hi-
ちょいと　蓋を　明けたら　蓋を　ちょいと　して　し

tara kono kokoi sahitjaru hũdemo deN sono
たら　この　ここに　さしてある　筆も　出ない　その

omoimo(24) koNmai kono ma:riba:none: soituo ma:
オモイも　小さい　この　周りくらいのね　そいつを　まあ

tjoi tjoi ko ko ko: jamãde tjo tjo:qto ma:-
ちょい ちょい こ こ こう ひもで ちょ ちょーっと まわ
(言いよどみ) (言いさし)

hitjoite sorẽde kosi: sasitara mo: sorẽga
しておいて それで 腰に さしたら もう それが

jatate soito ju:ta moNdjane· sono eo zu:qto
矢立 そいつを 言った もんだね その 柄を ずーっと

noboqte ite gakuri muko:e oritjoru soreo
登って 行って がくりと 向うへ 降りている それを

jatate jatatesaNrino saka imara areo to:ri-
矢立 矢立三里の 坂 今は あれを 通ってい

joraNtukeNdone: imara: sono: jusuwarakara
ないというけれどね 今は その 樗原から
(地名)

deta· simaNtokai detjoru ka:no hutio do:ro
出た 四万十川に 出ている 川の ふちを 道路が
(地名)

nukete areo basuN ima kajoutukeNne: ano
抜けて あれを バスが 今 通うということだからね あの

jatateno to:rawa ima hitowa to:ru moN nai-
矢立の 峠は 今 人は 通る ものは いない

zone: mukasiwa so:ju:jona tokowa itoNne:
よね 昔は そういうような ところは 行ったものだがね。

soNna ziqtimo orara huNdjorukeNdo soNna
そんな 実地も おれらは ふんでいるけれど そんな

hanasio ima hiteno kotomo naiwa
話を 今 しての ことも ないさ。

2. 漁師の思い出話

録音日時　1967年7月8日
録音場所　山本家（大方町田の浦）

話し手

(略号)	(氏　名)	(性別)	(生　年)	(職業)	(居　住　歴)
H	浜田数義	男	明治43年生	教員	幡多郡大方町田の浦→高知市1年7か月→佐川町3年→窪川町3年以後田の浦
Y	山本万助	〃	〃 23年生	漁業	大方町田の浦→大月町5年→善通寺3年以後田の浦

解説：方言研究家が親しい漁師に大しけ，地震，出買船，「しき」の休日などについて回想的に語らせている。

H　sorẽdẽ　ko:to:　suNdekara　dokoi　do:sitãgãdjaq-
それで　高等(科)が　すんでから　どこに　どうしたんだっ

taze　ko:to:dja　nai　ziNzjo:　suNdekara
たの　高等じゃ　ない　尋常(科)　すんでから

Y　ziNzjo:　suNdekara　oNda:　oNra:　nanijojo　diki-
尋常　すんでから　おれは　おれは　あれだ　すぐ

ni:　ano:　utĩdẽ　itineNka　nineNka　utino　rjo:-
に　あの　うちで　一年か　二年か　うちの　漁

si　sijoqteneja　(H　ũ:)　sorekara　sono　zibuN-
師を　していてな　それから　その　時分

nja　minajo　ma:　oNra:d̃atekara[1]　ueno　monowa
には　皆よ　まあ　おれぐらいの年格好から　上の　者は

minato　ju:ba:d̃jaqtane:　utĩdja:　zeniN　toreN-
皆と　いうぐらいだったね　うちでは　ぜにが　取れない

keNneja　poNto[2]　hanamai[3]　(H　ũ:)　ano·　katuobune-
からだな　全部　鼻前に　あのう　かつお舟

no　ĩdẽtori　ikumona　ĩdẽtori　iku　sekara　saNgo-
の　えさ取りに　行くものは　えさ取りに　行く　それから　珊瑚

zjumo　ikumona　saNgozjuni　iku　katoni　ikumona
珠も　(取りに)行く者は　珊瑚珠(取りに)　行く　鰹(漁)に　行く者は

katoni　ikuneja　(H ũ:)　taite:　ita　warẽgũno
鰹(漁)に　行くさ　たいてい　行った　お前のうちの

aijoraN　komai　tokiwaneja
兄らが　小さい　ときはさ

H　saNgozjuni　ni:tajo:nano·　sono　zibuN　saNgozju
珊瑚珠に　似たようなのう　その　時分　珊瑚珠は

uNto　toretakae
うんと　取れたかい

Y　toreta　toreta　toretakeNdoneja　dõ:d̃e　hunea:
取れた　取れた　取れたけれどだなあ　どうせ　舟は

kozai tunõd̃emo　hjaqpai(4)　aqtakeNneja
小才角でも　百艘　あったからなあ
(地名)

H　saNgozjubunẽgaja　(Y ũ:)　kozaitunõd̃akẽd̃e
珊瑚珠舟がね　小才角だけでも

Y　hunea　(H ũ:)　saNgozjuni　juku　hunemo　aru
舟は　珊瑚珠(取り)に　行く　舟も　ある

komai　hunemo　aqta　hjaqpai　aqtaneja　(H ũ:)
小さい　舟も　あった　百艘　あったなあ

sorẽga:　naNdjaqtazo　itineNneja　joNzju(5)　naNne-
それが　あれだったよ　一年だな　四十　何年

NdjaqtakaNeja　ano·　o·sikeno　ninjaneja　(H ũ:)
だったかなあ　あのう　大しけの　日にはなあ

sono　hunea　o:kataneja　tukau　eru　hunea　iqpaimo
その　舟は　大方　使う　える　舟は　一艘も

(意味つづく。言いなおし)

nai　ju:ba:　itamu　itõ:d̃ojo　(H naNdeja　sike-
無いと　いうぐらい　いたむ　いたんだよ　なぜだね　しけ
(意味つづく。言いなおし)

nineja　(H ũ:)　utira:no　hitorã:g̃a　mo:　uNto
のためさ　うちなんかの　人たちが　もう　うんと

siNda·(d)jako(6)　kametaõd̃i:neja　imano　jatã:g̃uno
死んだじゃないか　亀太おじだな　今の　弥太のうちの

ojãdĩdja ju:teneja
おやじだと　言ってだな

H joniN siNda ju:te ju:tanowa sono tokikae
四人　死んだと　言って　言ったのは　その　時かえ

Y ũ: sono tokĩdja
んー　その　時だ

H utirãdakẽdeno:
うちらだけでなあ

Y sorekaraneja kainoka:no seineNra:neja (H ũ:)
それからだな　貝の川の（地名）　青年らがだな

naNdja:qtojo sono saNgozjutori wakaisjũga
あれだったな　その　珊瑚珠取り（に）　若い衆が

torĩãgeni iteneja (H ũ:) minatoe hamaqtjoq-
取りあげに　行ってだな　港に　はいっていて

teneja (H ũ:) ano: namĩga huto: naqte hunẽ-
だな　あのう　波が　大きく　なって　舟

ga uti: hikeNkeni ti:ro ju: minatoeneja (H
が　中に　ひけないから　千尋と（地名）　いう　港へだな

ũ:) ma:sijoqte sono huneo kozaitunõdẽ ano:
廻していて　その　舟を　小才角で　あのう

H kainoka:no hune
貝の川の　舟

Y kainoka:no hune saNniNnorĩga oki muite nãga-
貝の川の　舟（で）　三人乗りが　沖に　向いて　流れ

rejoqtãgajo horja mõdoraNdukujojo (H ũ:)
れていたのよ　ほら　もどらずじまいよ

minatoe hamaqtjoqteneja
港へ　はいっていてだな

H hamaqtjoqtekara
はいっていてから

Y uti: hunẽga ikeNkeni tihiro ju: tokono mina-
内部へ　舟が　行けないから　千尋と　いう　ところの　港

tõga e: minatõdeneja kokokara hoNno mietjo—
が よい 港でだな ここから ほんの 見えてい

ru tokorõdjakeNneja (H ũ:) sju:qto itara
る ところだからなあ さっと 行ったら

e: tokoroo[7] hokoi iko: omo:te ita sokoe jo:
よい ところを そこに 行こうと 思って 行った (が)そこへ 行かれ

ikaN jamãgita ju: are jamakara ko: hukĩdasu
ない 山北と いう あれ 山から こう 吹きだす

kazeni oki muite nãgasare simo:ta[8]
風に 沖 向いて 流されて しまった

H ũ: mõdoraNduku
ん— もどらないで

Y mõdoraNduku
もどらないで

H seineN saNniN
青年 三人

Y rokuniN
六人

H rokuniNgae
六人がね

Y nihaĩdjaqtakeNneja
二艘だったからなあ

H ũ: saNniNdutũde nihaitomo nãgarete simo:ta
ん— 三人ずつで 二艘とも 流れて しまった

Y nãgarete simo:ta
流れて しまった

H atono disiNjono: oki: oqta ano tokini
後の 地震よねえ 沖に 居たの あの ときに

Y ano tokini· sono: tateisino oki: orimasitani—
あの ときに そのう 立石の 沖に 居りましたに
(地名)

no: ·hunei nejoqtãga soremo·
ね 舟に 寝ていたが それも

H hunẽdẽe nejoqta ũ:
舟で 寝ていた んー

Y soremãdẽe koamitate horja amitateni itjoqte
それまで 小網立て ほら 網たてに 行っていて

(H ũ:) amẽgẽa boroboro siteno (H ũ:) ãgẽro:
雨が ぼろぼろ して あげようと

omo·te mõdõro: omo:te amẽgẽa boroboro sita
思って もどろうと 思って 雨が ぼろぼろ した

a: mo: hitokuti nejo ju:te neta tokorõgẽa
ああ もう ちょっと 寝ようと 言って 寝た ところが

(H ũ:) sorekara sono tokini toqtara oNdara
それから その ときに 取ったら おれたち

do:jara wakaraNgãdjaqtaneja (H ũ:) sorekara
どうやら わからんのだったなあ それから

toqtene: ano: nejoqte hitokuti okite toqtã—
取ってねえ あのう 寝ていて ちょっと 起きて 取った

gãdja: (H ũ:) disiNwa djaqtamoNjo hokano
のだ 地震は だったもんよ ほかの
(発音はっきりしない) (意味つづく)

jama: gũzãgũza gũzãgũza kueru ano: umiwa
山は ぐざぐざ ぐざぐざ くずれる あのう 海は

ko: ue sita ue sitaneja hunẽgẽaneja hoNmani
こう 上 下 上 下 舟がだな ほんとに

iqsjakuba: motiãgãqtari oritari sitaneja
一尺ぐらい もちあがったり おりたり したなあ

(H ũ:) sorẽgẽa ano: sono tokino tunamino
それが あのう その ときの 津波の

omõdja sorekara susakino okĩgẽa pa:pa:to ni—
中心だ それから 須崎の 沖が パーパーと 二

saNbeN akaqtaNneja
三べん 明るくなったなあ

H ũ: susakino okĩgãja
んー 須崎の 沖がな

Y ũ: (H ũ:) ano nãdani orunineja ara susaki
ん— あの 灘に 居るのにだな あれ 須崎に

o:kena guNkaNga kitjoruneja i:joqtãga sorẽ—
大きな 軍艦が 来ているなあと 言っていたが それ

ga omõdjaqta sorẽga hazimẽdjaqta (H ũ:)
が 中心だった それが 始めだった

itibaN sono nisiwakinoneja
一番 その 西脇の(山)のだな

H disiNwa siraNdukujono:
地震は 知らないでいたのだね

Y sorekara naNdja:qtazo ãgete moNtajo moNta
それから あれだったよ (網をひき)あげて もどったよ もどった

tokorõ:ga sorekara jõga aketeno: okakarano
ところが それから 夜が 明けてなあ 陸上からの

hitorã:ga kowaizo kowaizo kowaizo ju:te
人たちが こわいぞ こわいぞ こわいぞと 言って

sjakerijoru
叫んでいる

H kowaizo ju:te
こわいぞと 言って

Y kowaizo ju:te
こわいぞと 言って

H nãdano hitorã:gano
灘の 人たちがね

Y ũ: nãdano kowaizo ju:te sjakerijorukeNne:
ん— 灘の(人が) こわいぞと 言って 叫んでいるからね

o: orite mõdorijoqta tokorõ:ga siomino sio—
お, おりて もどっていた ところが 潮干の 潮
(言いさし) (このあたりすこしつじつまが

no tataẽgani ano: haino aĩda hune to:ru
の 満ちたときに あのう 岩礁の 間(に) 舟の 通る
合わぬ)

to:ru tokorõga arũganeja sokõga ka:rani
通る ところが あるのだが そこが 川原に

naqtjorutu: kotõdeneja orijo korja do:ju:[9]
なっているという　ことでだな　あれ　これは　どういう

kotõdjaroneja oNda: soremãde soNna kota
ことだろうなあ　おれは　それまで　そんな　ことは

sirazaqtaNne: (H ũ:) do:ju: koqtjaroneja
知らなかったねえ　どういう　ことだろうなあ

korja warja to:reNro:ka sorekara oki· ma:qte
これは　わしは　通れないだろうか　それから　沖を　廻って

moNte simõdano oki itara hoNno[10] simõdani so—
もどって　下田の（地名）　沖（に）　行ったら　ほんに　下田に（地名）　そ

no hamaru mĩdũganeja (H ũ:) aNna toko uNto
の　はいる　水がだな　あんな　ところは　うんと

hamarukeNneja go:go: i:joru o:rjo* korja ko—
はいるからだな　ゴーゴーと　音をたてている　あれ　これは　こ

waizo kowaizo ju:te (H ũ:) oki: ma:qte moN—
わいぞ　こわいぞと　いって　沖に　廻って　もどっ

te se:kara ijano oki· moNtara jõga aketa
て　それから　伊屋の（地名）　沖に　もどったら　夜が　明けた

(H ũ:) tokorõ:ga poNto sono nanijo kiribosi
ところが　全部　その　あれだ　切干の

kiqtja:rũgao tuNdanarĩdeneja (H ũ:) okie
切ってあるのを　積んだままでだな　沖へ

nãgarejoru ju:tuwa naNbõguramo[11] sorekara
流れていると　いうことだ（発音不明瞭）　何くらも　それから

utino oki: moNta tokorõ:ga sono nanĩdja:to
うちの　沖に　もどった　ところが　その　あれだった

siotorino moNganeja hãgirijara[12] nanikaja ta—
潮取りの　者がだな　はぎりやら　なにかや　た

Nsũdja: naNdja: taNsuwa kokono
んすだの　何だの　たんすは　ここの

H jamasaNno[13]
やまさんの

Y jamasaN no g̃ãdjaqta[14] moNdja (H ũ:) hãgirijara
やまさんの　のだった　もんだ　はぎりやら

nanija hoNno tukani naqte nãgarejorukeNneja
なにやが　ほんとに　塚に　なって　流れているからだな

(H ũ:) sorekara oNda: hãgirio naNdja:qto: e:
それから　おれは　はぎりを　あれだった　よい

hãgirio miqtu hiro:te kite toqte ãgetja·qta
はぎりを　三つ　拾って　来て　取って　あげてあった(が)

sore dokono g̃ãdjaqtaka torareta sorekara ko—
それは　どこの　のだったか　取られた　それから　こ

kõdja nai imano tojõdino josimakuno maeni—
こで　ない　今の　豊おじの(息子の)　芳馬のうちの　前に

neja (H ũ:) koami orositaNneja (H ũ:) naN—
だな　小網を　おろしたんだな　あれ

dja:qtojo kono oNdãga moNta hunja: poNto
だったよ　この　おれが　もどった　舟は　全部

nãgare simo:te oki: oraNkeN (H ũ:) okae
流れて　しまって　沖に　いないか　陸へ

joru g̃a: joruneja (H ũ:) oNdara: moNta hune—
寄港するのは　寄港するなあ　おれたちが　もどった　舟

wa ami orositjoite sono hune mina hirai
は　網を　おろしておいて　その　舟を　みな　拾いに

itojo
行ったよ

H a: okini nãgaretãgao (笑声) so:kae so: hoita—
あー　沖に　流れたのを　そうかえ　そう　そした

ra kosaNra:[15] hune iqpaĩdjaqta mo: tanourãde
ら　あなたたちの　舟は　一艘だった?　もう　田の浦で

Y nihaĩdjaqtajo sono koamĩgabunẽganeja nihaĩdja—
二艘だったよ　その　小網舟がだな　二艘だ

qtajo
ったよ

H kosaN huneto dare
あんたの　舟と　誰

Y ano: oraN aijora·toneja oNda:rato nihaĩd̃jaqta
あのう　おれの　兄貴たちとだな　おれたちと　二艘だった

H ũ: ju:te[16] jonetjaNkano (Y ũ:) mo: tanourãd̃e
んー　まあ　来ちゃんかね　もう　田の浦で

nãg̃arete simo:te sono nihaisika
流れて　しまって　その　二艘しか

Y poNto nãg̃are simo:tjoqta (H ũ:) joruĝa:
みんな　流れて　しまっていた　寄港するのは

joruneja (H ũ:)
寄港するなあ

H sorẽd̃e zeNbu hiro:te kuru kota hiro:te ki-
それで　全部　拾って　来る　ことは　拾って　来

takae
たかね

Y hiro:temo kuruneja (H ũ:) hokano hunja· kũ-
拾っても　来るさ　ほかの　舟は　く

d̃aketa hunemo aqtakeNdoneja
だけた　舟も　あったけれどな

H hune: sono tokini: sono o:namĩg̃a kite utira:
舟　その　ときに　その　大波が　来て　うちなど

jamasaNno iẽg̃a nãg̃areta tokijono: (Y ũ:) sore-
やまさんの　家が　流れた　ときよねえ　それ

kara kokono maeni ano: zjakõg̃ojãg̃a aqtãg̃a nakama-
から　ここの　前に　あのう　じゃこ小屋が　あったが　仲間

no arera:mo zeNbu nãg̃arete simo:ta tokijono:
の　あれなども　全部　流れて　しまった　ときよねえ

Y nãg̃areta
流れた

H sono tokini hitowa itamja seraqtakano:
その　ときに　人は　損害は　なかったかねえ

Y ũ: hitowa jamasaNno ba:g̃a siNdabã:d̃janeja
んー　人は　やまさんの　婆が　死んだくらいだな

H jamasaNno oba:saNwa arja siNdjoqte jotõgisijoqte
やまさんの お婆さんは あれは 死んでいて お通夜をしていて

nãgaretagãdja nakaqtakae arẽde siNdakae (騒音)
流れたのじゃ なかったかね あれで 死んだかね

Y jotõgisijoqtẽdja nakaqturo arja: daitaiwa jo: ĩ-
お通夜をしていてでは なかっただろう あれは 大体は 動け

gokaNjo:ni naqte warikaqtãgãdjaqtakeNno: jo: ĩgo-
なく なって 悪かったのだからねえ 動け

kaNjo:ni naqte nãgarete siNdãgãdjano
なく なって 流れて 死んだのだ

H a so:kae
あ そうかい

Y utiãgetjoqtãgãdjano
うち上げていたのだ

H ũ: so:kae ũ: dẽgaiwa omoni doNna: koto sitaze
ん- そうかい ん- 出買は おもに どんな ことを したの

Y dẽgaiwaneja (騒音) kokowa hitotumo nai tokĩdjaqtã-
出買はだな ここは 少しも 無い ときだった

ga hamãdjaqtakeNneja (H ẽ:) zu:qto koqkaraneja
が 浜だったからなあ ずうっと ここからだな

(H ẽ:) naNdja:qto dẽgaiwa ima iwasio kũgatukara-
あれだった 出買は 今 いわしを 九月から

neja (H ũ:) seqkiiqpaiwa taite iwasi kaini ita
だな 大晦日いっぱいは たいてい いわしを 買いに 行った

urumeoneja
うるめをだな

H dokoie
どこへ

Y ijokaraneja (H ũ:) hjũ:ganeja (H ũ:) omo ijo hjũ:-
伊予からだな 日向を おもに 伊予 日向

gãdjaqtaneja (H ũ:) oNda: naninimo itajo geNkaini-
だったな おれは 玄海にも 行ったよ 玄海に

moneja (H e:) geNkainãdanimo ito:jo
もだな 玄海灘にも 行ったよ

H iwasi kainija (Y ũ:) ũ: geNkainãda hukuokano
いわしを 買いにか ん- 玄海灘(と言えば) 福岡の

atarikano
あたりかな

Y o: hukuokano tjoqto temaeno iwaja ju: tokõ-
おう 福岡の ちょっと 手前の 岩屋と(地名) いう とこ

g̃a omõd̃jaqtaneja
ろが おもだったな

H ũ: hoitara tusima atarimo itakano aqtiwa
んー そしたら 対馬 あたりも 行ったかね あっちは

Y aqtiwa ikaN
あっちは 行かない

H ũ: hoitara juwajãg̃a ma:
んー そしたら 岩屋が まあ

Y juwaj amãd̃ẽd̃jaqta juwaja ju: tokõd̃jaqtaneja
岩屋までだった 岩屋と いう ところだったな

(H ũ:) akowa sono tokinja kisjãg̃a kijoqtaN-
あそこは その ときには 汽車が 来ていた

neja (H ũ:) ano itibaNwaneja (H ũ:) ninaĩg̃a
なあ あの 一番はだな 担いの漁商人が

ko:teneja (H ũ:) nibaNwa kisjãg̃a ko:te (H
買ってだな 二番は 汽車(で運ぶ商人)が 買って

ũ:) saNbaNwa sono daitaĩg̃a sono· itibaN haN-
三番は その 大体が その 一番 半

neba:ni naru tokĩd̃jaqtaneja (H ũ:) miNnano
値ぐらいに なる ときだったな みんなの

tuboe nanisitara o:kena homairae tuNdarineja
壺へ あれしたら 大きな 帆前船へ 積んだりだな

(H ũ:) oNdarã· tumu hunewa ma: niseNgaNba:
おれたちの 積む 舟は まあ 二千貫くらい

tumu hunẽd̃jaqtaneja
積む 船だったなあ

H dẽg̃aigaja (Y ũ:) niseNgaN tumetaka are so-
出買舟がな 二千貫 積めたか あれ そ

re: namao kaũg̃ajono:
れ 生(の魚)を 買うのよなあ

Y namao ko:te
生を　買って

H ko:te sorekara do:
買って　それから　どう

Y sio hiteneja
塩　してだな

H ũ: taru moqti ite
んー　樽　持って　行って

Y tarũdja: ikaNkeN inãgara kaNkoe sio irete
樽では　いけないから　そのまま　(漁船の)生簀へ　塩を　入れて

toqte moNte
取って　もどって

H ho: kaNkoe sonomamano (Y ũ:) utimãde toqte
ほう　生簀へ　そのままの　うちまで　取って

moNtakae
もどったかい

Y ũ: uti: toqte moNte sono tokinineja (H ũ:)
んー　うちに　取って　もどって　その　ときにだな

iqpaĩde naNbu mo:ketato ju:tara saNniNde
一艘で　いくら　儲けたかと　言ったら　三人で

noqte ite joqtariwakẽdjaqtakeNneja gozju:eN
乗って　行って　四人分けだったからだな　五十円

aqtakeNneja hitoko:kaininеja
あったから　一航海にだな

H soitara nihjakueN mo:ketajaika
そしたら　二百円　儲けたじゃないか

Y u: nihjakueN
んー　二百円

H hunewa (hoitara) hitoribuNni naru ũ:
舟は　(そしたら)　一人分に　なる　んー

Y sono tokini·no: gozju:en ju:taraneja rokueN—
その　ときの　五十円と　言ったらだな　六円

djaqtakeNneja hĩ̃ga oNdarã:g̃a hijo:ni kakaru
だったからな　日が　おれたちが　日傭に　かかる

tokinja:neja
ときにはだな

H hĩ̃g̃a tukĩ̃d̃jarõ̃g̃ae
日が?　月だろうな

Y tukĩ̃g̃a tukĩ̃g̃a rokueNjo niziqseNdjaqtakeN
月が　月が　六円よ　二十銭だったから

H hĩ̃g̃a
日が

Y hĩ̃g̃a (H ũ:)
日が

H tukino hijo:̃g̃a rokueNde ũ: hoNnara a: jatu-
月の　日傭が　六円で　んー　そしたら　あー　八

kibuNjono: hitoko:kaĩ̃d̃e hitoko:kai naNniti-
月分よなあ　一航海で　一航海　何日く

ba: kakaqtaze
らい　かかったの

Y ano: sjõ:g̃atuno: zju:hatiniti suNde iteneja
あのう　正月の　十八日　すんで　行ってだな

(H ũ:) nĩ̃g̃atuno soko ita tokinja nĩ̃g̃atuno
二月の　そこへ　行った　ときには　二月の

nakã̃g̃oroni moNtaneja
中頃に　もどったさ

H ũ: juwajae ita tokinja
んー　岩屋へ　行った　ときには

Y hitotukiba: kakaqteno:
一月くらい　かかってなあ

H hitotukiba: kakaqteno:
一月くらい　かかってなあ

Y soNgjani mo:keru tokimo arukeNdoneja (H ũ:)
そのように　儲ける　ときも　あるけれどだな

ano: hjũ:g̃ano simanoura ju: tokõde tuNda
あのう 日向の 島の浦と（地名） いう ところで 積んだ

tokinja:neja (H ũ:) kũg̃atuno maturĩdjaqta
ときにはだな 九月の 祭りだった

kũg̃atuno zjũ:g̃onitimaẽdjatãg̃a ko:tja: sjaNto
九月の 十五日前だったが 高知は 残念にも

jasu:N naqteno: (H ũ:) ko:ti tuNde kurũg̃a
安く なってなあ 高知へ 積んで 来るのを

sonõ g̃a ho hosi: jaqta (H ũ:) mo: ikaNkeN
その ものを ほ 乾しに やった もう いけないから
（このあたり発音不明瞭）（言いさし）

korja hirosimae iko:zeja jute hirosimae
これは 広島へ 行こうよと 言って 広島へ

itãg̃a hirosimãdja: naNdja:qtazejo hjakueNba:
行ったが 広島では あれだったよ 百円くらい

soNga ita kotomo arukeNneja (H ũ:) sorekara
損を した ことも あるからなあ それから

mata mõdorisinani uti mõdoraNdukuni zu:to
また もどる途中で うちに もどらずに ずうっと

ijõde ko:te koNdo sono g̃a ko:ti· moteita
伊予で 買って 今度 その ものを 高知へ 持っていった

sorẽde sono soN toqte (H ũ:) torikaesita
それで その 損を 取りかえして 取りかえした

kotomo aru soNdjakeN sjo:baiwa ju:tati ika—
ことも ある それだから 商売は 言っても 駄

na:ja (H ũ:) soNno iku tokimo arukeNneja
目だよ ときも あるからなあ

H sõ:djano: gozju:eN mo:ketemo soNsuru kotomo
そうだなあ 五十円 儲けても 損をする ときも

aru sono totjũ:de sikeni o:tari suru koto
ある その 途中で しけに あったり する ことは

nakaqtakae dẽg̃aibunemo sono: kikaibunedja
無かったかね 出買船も そのう 機械船では

naike: uNto kikeNna meni o:turõgae
ないから　うんと　危険な　目に　あっただろう

Y ũ: taĩgaineja hijori miteneja ano: e: mina-
んー　大概だな　日和を　見てだな　あのう　よい　港

toe hamerukeNneja (H ũ:) nanijojo hijorĩga
へ　入れるからな　あれだ　日和が

suwaranja: dete ikaNkeNno: a sono zibuNnja-
固まらなければ　出て　行かないからなあ　あ　その　時分には

ne: (H ũ:) soNdjakeN heqsani kakaqtãgãdjakeN
ねえ　それだから　久しく　かかったのだから

wari: hijorinja:……
悪い　日和には

H a: kju:sju:mãde ikuni hitotuki kakaru jũ:gã
ああ　九州まで　行くのに　一月　かかると　いうが

soNna koto aruke: maqsũgu iketara soNnani
そんな　ことが　あるかい　まっすぐ　行けたら　そんなに

hitotukimo……
一月も　……

Y kowai omo:tarano: hajo: minato torukeNno:
こわいと　思ったらなあ　早く　港へ　入るからなあ

doko dokoi itara e: minato arutu: kotõgã
どこ　どこに　行ったら　よい　港が　あるという　ことが

wakaqtjorukeNno: (H ũ:) sorekara kono sorẽ-
わかっているからなあ　それから　この　それ

dẽ atira ju:tarano: tjõ:do kono ijoe hamaq-
で　あちらと　言ったらなあ　ちょうど　この　伊予へ　入っ

tara nanĩdjano: tosawa soNna koto naikeNdo
たら　あれだな　土佐は　そんな　ことは　ないけれど

ijoe hamaqtara sono kaĩgãNwano: kaĩgãNno
伊予へ　はいったら　その　海岸はなあ　海岸の

siõgã nanijono:si kono o:kena ka:no se:gurai
潮が　あれだね　この　大きな　川の　潮ぐらい

ikukeNno:si sono miteino siõgano:si (H ũ:)
流れるからねえ その 満干の 潮がねえ

soNde sioni hikasukeNno taĩgai sono siõdja-
それで 潮に ひかすからなあ たいがい その 潮だ

qtara dokozoni ikuto ju: kotõga kazẽga sjo:-
ったら どこかに 行くと いう ことが 風が 少

sjo: wari:temone.[17] (H ũ:) jarukeNneja (H ũ:)
々 悪くてもねえ 舟を出すからなあ

sio kuqte soNdja:keni siono wari: tokinja:
潮を 計算して それだから 潮の 悪い ときには

nanijo kazẽga jo:nakerjanja kazẽga wari:
あれだ 風が よくなければ 風が 悪いと

ju:tara nanijo sio kuqte jarukeN sono zika-
言ったら あれだ 潮を 計算して 出すから その 時間

Ndeneja imakara kono siõdjaqtara koNdono
でだな 今から この 潮だったら 今度の

siowa dokomãde ikerukeNdo sjo:sjo:wa ano
潮は どこまで 行けるけれど 少々は あの

kazẽga wari:temo jareruke N jaro:kanejatujo:-
風が 悪くても 出せるから 出そうかなあというよう

ni jaqpari sio kuqte jaqtakeNneja
に やっぱり 潮を 計算して やったからなあ

H soNnani sio hikijorukajo akowa[18]
そんなに 潮が ひいているかね あそこは

Y hikijoru (H e:) kowaizo go:go: go:go
ひいてる こわいぞ ゴーゴー ゴーゴー

H soNnara sono siõga gjakuno tokinja: nakanaka
そんなら その 潮が 逆の ときには なかなか

hunja ikana:no:
舟は 進まないなあ

Y ikaNkeNneja
進まないからなあ

H ũ: hoNdara sioni norujo:ni ikisimõdori
んー そしたら 潮に 乗るように 行き帰りを

kaNgaete zikaN kaNgaete jarũgajono: 〈Y a: so:〉
考えて 時間を 考えて やるのよねえ ああ そう

ũ: kizitujono:(19) mukasiwa asakara jasumĩdjaq-
んー 式日よなあ 昔は 朝から 休みだっ

turoe
たろう

Y mukasja jasuNdaneja ano: mukasikara ima
昔は 休んだなあ あのう 昔から 今は

joke jasumaNkeNdoneja (H ẽ:) mukasinja ro-
あまり 休まないけれどだなあ 昔は 六

kugatuhi:toito
月一日と

H rokũgatuhi:toiwa do: ju:te jasuNdaze
六月一日は どう いって 休んだぜ

Y seqkũdja ju:te jasuNdaneja korja ano rokũ-
節句だと 言って 休んだなあ これは あの 六

g̃atuwa
月は

H naNno seqku ju:te
何の 節句と 言って

Y seqku ju:te ju:keNdo orara: koziwa wakaraN-
節句と 言って 言うけれど おれたちは 故事は わからない

keNdo naNdjaneja jaqpari rokũgatuni naqtara
けれど あれだな やっぱり 六月に なったら

〔jasumitaikeN jasuNdaro:〕 mo: (笑声) 〔sjo:g̃a-
〔休みたいから 休んだろう〕 もう 〔正月
(女の声速くから)

tũga sorekoso iqsju:kaNba: mukasi aqtatũdja-
が それこそ 一週間くらい 昔 あったというじゃ

ika〕 rokũgatu rokũgatuno tukinja miqkaba:
ないか〕 六月 六月の 月には 三日くらい

jasumĩga aqtakeNno zju:hatiniti zjũ:gonitiwa
休みが あったからね 十八日 十五日は

H zju:hatinititone: ũ:
十八日とねえ んー

Y sitĩgatuni naqtara nĩdoneja tanabatasaNto
七月に なったら 二度だな 七夕さんと

boNtõde boNwa miqka jasuNde (H ũ·) oNda:no
盆とで 盆は 三日 休んで おれたちの

tokinja miqkãdjaqta sono maenja iqsju:kaNmo
ときには 三日だった その 前には 一週間も

jasuNdari suru kotomo arukeNdoneja (H ũ:)
休んだり する ことも あるけれどだな

H sono:: ma: jo: jasumĩga aqtãga nanijui[20] soN—
そのう まあ よく 休みが あったが 何かい そん

na tokubetuni kimaqta sikisikino jasumi
な 特別に きまった 式日式日の 休み

ĩgainimo amãgoĩdja: naNdja: ju:te uNto jasu—
以外にも 雨ごいだ なんだと 言って うんと 休み

mĩga arja: sezaqtakae mukasja
が ありは しなかったかね 昔は

Y aqtojo mukasjaneja
あったよ 昔はだな

H bjo:kino hajaqta tokinimo soNna kotõga arja—
病気の はやった ときにも そんな ことが あり

sezaqtakae
はしなかったかえ

Y bjo:kino
病気の

H sekirĩdosi ju: ga: siqtjorukae
赤痢年と いう のを 知っているかね

Y ū:a siqtjoru
んーあ　知っている

H sono sekirĩdosinja: nanika tokubetuni jasu-
その　赤痢年には　何か　特別に　休

Nda koto naikae
んだ　ことは　ないかえ

Y tiqtomo siraN nainika:raN
少しも　知らない　どうもないらしい

H utirã:d̃ja mukasi ano: bjo:kini naqta tokini
うちなんかでは　昔　あのう　病気に　なった　ときに

gokito: jaqtono:
御祈禱を　やったよ。

注

1. 木挽閑談

(1) 〔p. 5〕 ku ところ，うち，家。よさこい節に“いうたちいかんちやおらんくの池にゃ…”がある。

(2) 〔p. 5〕 官公地，つまりここでは，国有林。

(3) 〔p. 5〕 hata は共通語だからそのまま直訳したが，私見によれば，ほんのわずかだが，方言的なにおいがあるようにも感ずる。

(4) 〔p. 6〕 toqti kitjoruと切り離す。（訂正）共通語の「て」「で」に当たるところに／ti//di／があらわれる。この現象は大方町でも，万行（まんぎょう）・鞭（ぶち）（厳密には「浮鞭」）・加持（かもち）・湊川（みなとがわ）などの部落に限られており，それも主として老年層の間に見られる。

(5) 〔p. 6〕 〔k〕が脱落している。

(6) 〔p. 6〕 õga のこぎりの大きいもの。

(7) 〔p. 6〕 hira 方，側。

(8) 〔p. 6〕 地点・目標などをあらわす「へ」に相当するものに／i／があらわれる。土佐清水市・大方町・高岡郡旧長者村などで使用される。

(9) 〔p. 7〕 sa~~o~~gu or sa~~wa~~gu あちこちかけずりまわる。

(10) 〔p. 7〕 taNmetima:ru を意図したものであろう。taNmeru or taNneru さがす。

(11) 〔p. 7〕 sinasu 物をつくりあげる。

(12) 〔p. 7〕 木に墨の線をつけるのである。

(13) 〔p. 8〕 主格をあらわす助詞。

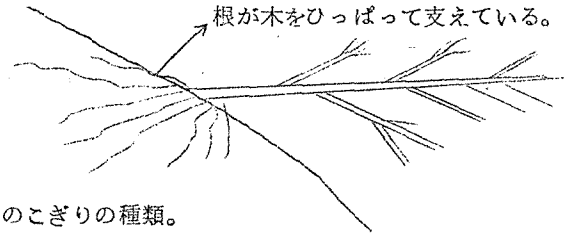
(14) 〔p. 9〕 長いたけの木を意味しているようである。

(15) 〔p.10〕 dake ①断崖 ②石まじりの土。dake が独立して使われることもある。

(16) 〔p.10〕 tu は接頭語。

(17) 〔p.10〕 riN 一種の枕木。

(18) 〔p.11〕 山の傾斜地に立っている木ゆえ，その木が倒れる際など根が蘿のようになってひっぱる働きをする。それで，根を turu と言ったものであろう。



(19) 〔p.11〕 のこぎりの種類。

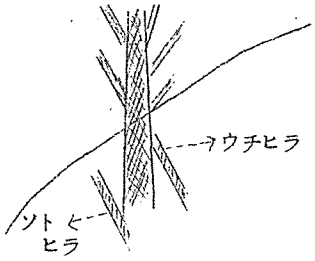
(20) 〔p.11〕 立木を切った際，木の重心がのこぎりにかかって来るので，それを避けるために切り口に挿入するもの。

(21) 〔p.12〕 na~~g~~asu 「下へ落とす」の意。

(22) 〔p.12〕 立木の上側。

(23) 〔p.12〕 立木の下側。

(24) 〔p.14〕 つぼの一種か。



（追記）

* 〔p. 9〕 一種の植木のようで，注17のriNと同じような意味らしい。

** 〔p.11〕 「受口を切る」は倒そうと思う方の側に斧を入れること。

***〔p.13〕 〔koso〕に近く聞こえる。

2. 漁師の思い出話

(1) 〔p.16〕 date は，「年配」の意。「達」のなまったもののようであるが，単なる複数でなく，「年齢層」の意味に重心がうつっている。（浜田数義氏説）

(2) 〔p.16〕 poNto（全部）は，筆者も少年時代長岡郡後免町（現在南国市）近傍でよく使用した。類語にneNgoro；suqtoN があった。

(3) 〔p.16〕 hanamai 足摺岬周辺をいう。

(4) 〔p.17〕 pai は，舟を数える単位。須崎市あたりでも使用。

(5) 〔p.17〕 joNzju: の前に meĩdi が，ごくかすかに入っている。

(6) 〔p.17〕 siNdã:d̃jaiko を目指しているが，d と i が silent になっているし，ko もはっきりしない。

(7) 〔p.19〕 もちろん tokoro: と表記すべきかもしれぬが，仮りにこのように表記しておく。

(8) 〔p.19〕 このような場合，幡多方言では助詞の te が顕現しないことが，しばしばある。

(9) 〔p.22〕 do: ju: と分けて書くことが考えられる。

(10) 〔p.22〕 浜田数義氏によれば，hoNno は，副詞であるが，実質的には感動詞に近いという。

(11) 〔p.22〕 kura は，野菜などの株を数える単位。

(12) 〔p.22〕 hãgiri たらいの形で，更に大型の桶。

(13) 〔p.22〕 jamasaN 三という家の屋号。地震のとき家が流されたらしい。

(14) 〔p.23〕 ga に独立性の強いと思われるときは，仮りに分けて表記した。

(15) 〔p.23〕 kosaN 目上に対してのみ使用する。若い人は使用しない。

(16) 〔p.24〕 ju:te ことばの間に自然にはさまった一種の発語。

(17) 〔p.31〕 一般には waru:temo であるが，老人にはこのような特殊の言い方がある。

(18) 〔p.31〕 ako（あそこ） 幡多地方のみならず，県下で広く使用される。（長岡郡大豊村などを除く。）

(19) 〔p.32〕 録音の関係で明瞭性を欠く。sikizitu を意図したものか。ちなみに「しき」は，浜田数義氏『大方町方言集』に，「正月，盆など年中行事として決っている休日』とある。

(20) 〔p.33〕 話の途中にはさむ一種の間ことば。ただし一般には使われぬ。

＊ 〔p.22〕〔o:rjo〕〔orijo〕あたりを目指していると思われるが，〔dʒi:ro〕に近く聞こえる。

非　売　品

1968年3月

国立国語研究所　話しことば研究室　発行

東京都北区稲付西山町